

非実現形式「(危なく) シタ」

津 田 智 史

1 調査の目的

2017年度におこなった気仙沼市方言調査では、高年層の話者を対象として、当方言のテンス・アスペクトなど時間表現に関する面接調査をおこなった。時間表現といってもさまざまな局面が想定できるが、今回の調査において特に取り上げたのは、過去における非実現形式である。

過去の非実現形式については、『方言文法全国地図』（以下、GAJと略記）などをみると、全国的に「するところだった」や「しそうだった」「しかけた」といった形式が広く使用されており、とりたてて取り上げられるのは西日本諸方言にみられるシヨッタという形式がほとんどである。ところが、東北大学方言研究センター編の『被災地方言会話集』（以下、『会話集』と略記）をみると、非実現の場面で「(危なく^{注1}) シタ」という表現がみられる。語自体としては共通語でもみられるものであるが、表現として若干の違和感を覚えるものである。同一話者からではあるが、この表現は複数回みられることから、気仙沼市の過去の非実現形式と認められるといえよう。そこで、特にこの表現に焦点を当て、「(危なく) シタ」が当該地域においてどのような状況で使用されているのかを明らかにするための調査をおこなった。

本稿では『会話集』にみられるこの「(危なく) シタ」の用法について考察する。ただし、後述するように追加調査の必要もあり、本稿では主に、形式の分布とバリエーション、またその使用条件について言及する。

本稿の内容は次の通りである。2節では、これまでの方言研究における非実現形式の概要に触れる。3節では、『会話集』でみられる「(危なく) シタ」の具体例を確認するとともに、ほかの地域での使用を方言地図類や記述報告から確認する。そこから、「(危なく) シタ」形式のバリエーションと分布を明らかにする。4節では、2017年度実施の気仙沼市方言調査の結果および先行研究のデータから、「(危なく) シタ」形式の使用されうる条件を、① 動詞分類、② ヴォイス、③ 地域差という観点から考察していく。

2 非実現形式の概要

上述のように、これまでの日本語方言における過去の非実現形式に関する報告は、多くの場合、西日本諸方言でみられるシヨッタ (<もう少しで>オチヨッタ [落ちるところだった] など) に関わるものがほとんどである。GAJ4 や『新日本言語地図』をみても、その形式の分布が広く認められ、かつ西日本諸方言の進行相を表すとされるヨル形 (フリヨル、アルキヨルなど) の分布域にほぼ重なることもあり、その点で注目を集めるものである。一方で、東日本を中心に、スルトコロダ

ッタやシソーダッタという形式が目立つ。以下に、『新日本言語地図』所収の「<もう少しで>落ちるところだった」の地図を改編したものを示す。

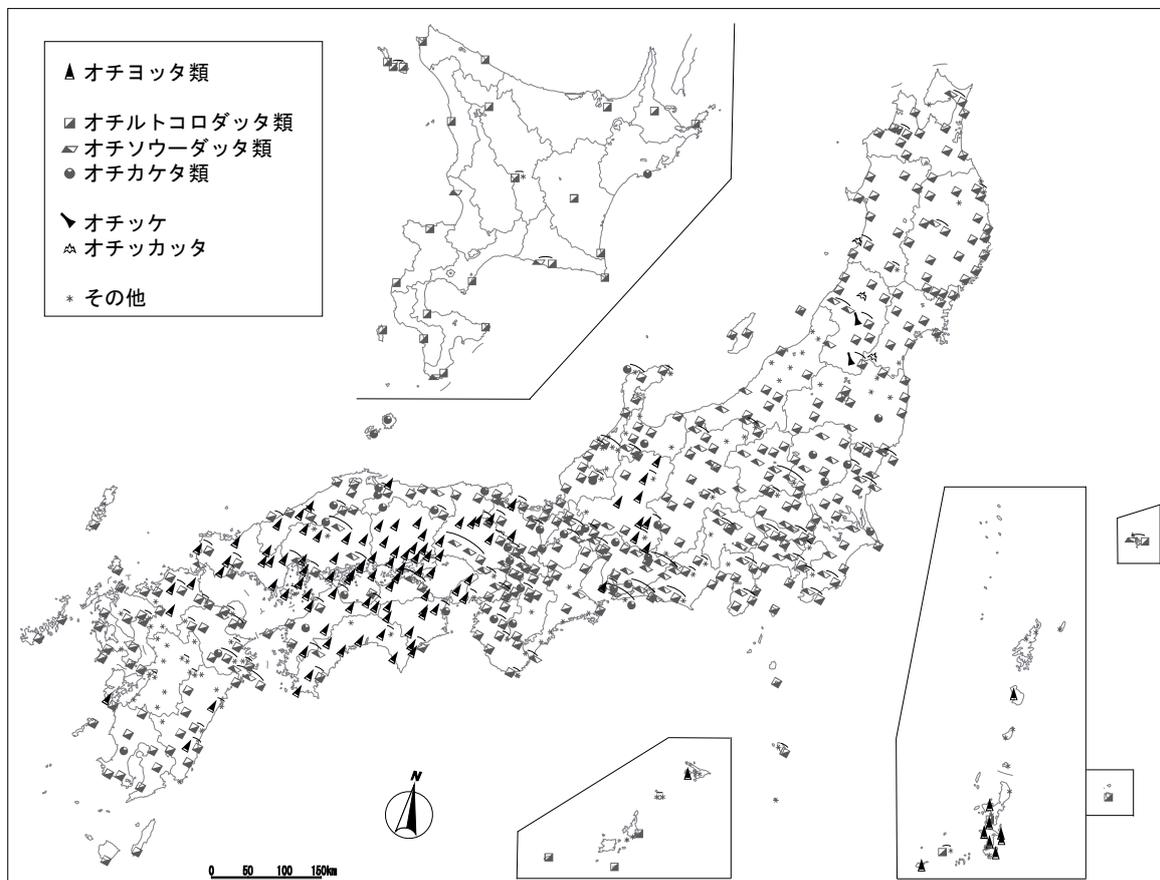


図1 「<もう少しで>落ちるところだった」(津田 2016 を改編)

図1 をみるとわかるように、西日本諸方言にシヨッタが多くみられ、東日本を中心に全国的に、分析的なオチルトコロダッタやオチソーダッタ、オチカケタなどという形式が広く分布している。ここで扱う「(危なく)シタ」の形式は、『新日本言語地図』においては、気仙沼市はじめ宮城県や東北地方でも確認できない^{注2}。

3 「(危なく)シタ」形式の用例と分布

ここからは、実際に『会話集』でみられた気仙沼市方言における過去の非実現形式についてみていくことにする。また、東北方言(特に山形県方言)においては、テンス過去を表す形式が複数確認できる。それらの形式についても、過去の非実現を表す際に使用可能であるか、先行研究のデータから探っていくことにする。

3.1 『会話集』にみられる非実現形式

それでは、『会話集』の中で「(危なく) シタ」がどのように使用されているのか、実際の例からみていきたい。下記(1)および(2)は、『会話集3』の「14 猫を追い払う」場面の実演会話である。例をみてわかるように、「アブナグ モッテガレダ/カジライダ」といった表現がみられる。なお、「14 猫を追い払う」場面については宮城県名取市方言でも同様に集録・公開されているが、この表現は気仙沼市方言のみで確認できるものである。また、『会話集3』には(1)(2)のような会話例がみられたのだが、ここに収録されていないものの、3回目の実演の際にも「(危なく) シタ」が確認できたということである。つまり、同一話者の発話とはいえ、気仙沼市方言ではかなり頻繁に使用される表現であることが窺える。

(1) [気仙沼市] 14 猫を追い払う [1] ①実演1 (『会話集3』)

〈前略〉

004B : アー サガナ カレダカ。

あー 魚 食われたか。

005A : クワネドオモーケントー ドゴノネゴダベー。

食わないと思うけれど。 どの猫だろう。

006B : アーアー ソガー。

あー そうか。

007A : イヤー アブナグ モッテガレダヤー。

いや 危なく 持っていかれる [ところだった] よ。

〈後略〉

(2) [気仙沼市] 14 猫を追い払う [1] ②実演2 (『会話集3』)

〈前略〉

005A : アー。 サガナ カジッタイベカ。 アラ カジッテ、ア イダネ。 サガナ アッタ。

あー。 魚 食われたか。 あら かじって、あ あるね。 魚 あった。

005A : アブナグ カジライタデバ。

危なく かじられる [ところだった] ってば。

006B : アーアー イガッタ ホンデア。 {息を吸う音} ホンデモナー カラスーモ

あー よかった それでは。 {息を吸う音} それでもなあ カラスも

クッカモシンネガラー アミ カッテククッガラー。

来るかもしれないから 網 買って×来るから。

007A : アミ カゲダホ イーベガネ。

網 掛けた方 いいだろうかね。

008B : ウーーン。 ソノホ イー。

うーん。 その方 いい。

009A : イヤーイヤ アブナグ モツテガレダヤ。

いやいや 危なく 持っていられる [ところだった] よ。

〈後略〉

(3) [気仙沼市] 24. 猫を追い払う [1] (『会話集 4』)

〈前略〉

002B : ナニシタヤ。

どうしたよ。

003A : ネーゴ ホラ イマ サガナ クワエデ アレ (B ウン) コッチ ミーミー
猫 ほら 今 魚 くわえて あれ (B うん) こっち 見ながら
イッタデバー。

行っただけ。

004B : アー ソー。

あー そう。

〈後略〉

一方で『会話集 4』では、(3) をみるとわかるように「(危なく) シタ」は確認できない。ただし、これは文脈による影響がみられるためだと思われる。(1) (2) は猫が魚を持っていきそうになったことを話しているが、(3) では猫がくわえていったことを話している。つまり、「もう少しで」という文脈でなかったために確認できなかったものと考えられる。なお、名取市方言においては、ここでも確認できなかった。

さて、非実現形式についてみていく際に、気をつけなければならないことがある。それは、どの要素が非実現の意味を表しているのか、という点についてである。これに関しては、次のような言及がある。

注意が必要なのは、本多 (2000) が指摘するように、ここでシヨッタが非実現の意味を担うかどうかとは別に、非実現の解釈を与える機能を持つ「もう少しで」といった表現の存在である。非実現といった意味がシヨッタというヨル形によって表される意味なのか、「もう少しで」といった副詞的な要素、もしくはそれとの関わりにより表される意味なのかは確認する必要がある。(津田 2014)

気仙沼市方言の「(危なく) シタ」については、(1) (2) のいずれの例でもアブナグが付随しており、これは非実現の事態を表す際に必須であると考えられる。それは、シタの形式からも窺える。東北方言、特に気仙沼市のシタ形式は、運動動詞ではテンス過去を、存在動詞ではテンスに限らず

継続的な事態を表すものの、それだけで非実現を表すことはない。そうであるならば、「(危なく) シタ」という表現全体で過去の非実現を表しているにとらえられよう。

3.2 「(危なく) シタ」形式の分布

ところで、テンス過去を表す形式として、日本語ではシタ形式が使用される地域が多い。ところが、東北方言（特に山形県方言）のテンス過去を表す形式には、いくつかバリエーションがみられる。山形県を中心に、スルガッタやシタガッタのように、カッタ形式がみられる（金田 1983、津田 2011 など）。また、主に回想を表す際に用いられるが、山形県山形市方言においては違ッケ、要ッケなど状態用言にケが接続した場合には、テンス過去を表すという（渋谷 1999）。非実現を表す形式として、「(危なく) シタ」自体の報告はほぼみられないが、上記のようにタ形ではないテンス過去を表す形式の場合についても、さらに確認する必要があるだろう。

まず、工藤編（2001）の各地方言のテンス・アスペクト調査のデータから、山形県南陽市における非実現のデータを抜き出したものをみていく。

(4) 山形県南陽市の非実現形式（工藤編 2001 より抜粋）

地域	共通語例文 方言語形	時間的意味	動詞分類など
山形 南陽 市	(死にかけたが実際は死ななかったのを話題にして) 金魚がもう少しで死ぬところだった キンギョ イマチットデ シヌガッタ/シヌドゴダッタ	直前＝ 非実現	主体変化動詞 死ぬ
	(学校に行きかけたが結局行かなかったのを話題にして) もう少しで学校に行くところだった イマスコシデ ガッコーサ インカッタ/イグドゴダッタ	直前＝ 非実現	主体変化動詞 行く
	(窓を開けかけたが結局開けなかったのを話題にして) もう少しで窓を開けるところだった イマスコシデ アゲッカッタ	直前＝ 非実現	主体動作客体変化動詞 開ける
	(飲みそうになったが結局飲まなかったのを話題にして) もう少しでお酒を飲むところだった イマスコシデ ノムドゴダッタ/ノムドゴダケ/ノムガッタ	直前＝ 非実現	主体動作動詞 飲む

これをみると、南陽市方言では「イマスコシデ スルガッタ」という形式が頻繁に使用されていることがわかる。また、渋谷（1999）では、「危惧的思い出し」と名付け、ここで扱う「(危なく) シタ」形式を扱っている。

(5) 28a もう少しでそのお菓子をクークハー

ここでのハーは詠嘆を表すもので、「すべきでないことをしかけた/した」という話し手の気持ちを表出するものだとしている。それにより、(5)は「あやうく食べかけた」という意味を表すとしている（渋谷 1999）。渋谷（1999）は、この用法は一人称でも使用可能なことから、ケの思い出し用法からの拡張用法とする。いずれにしろ、これらはまさしく「(危なく) シタ」と同じく非実現を表すものであろう。

それでは、これらの形式はどういった分布を成しているのだろうか。図1の「<もう少しで>落ちるところだった（将然相・回想）」の分布をみると、スルガッタ（オズッカッタなど）は秋田県本

荘市、山形県戸沢村、宮城県七ヶ宿町で、スッケ（オジッケなど）は山形県西川町や山形県米沢市でみられることがわかる。山形県を中心にその周辺地域でも確認できる。続いて、GAJ4 の分布についても確認する（図 2）。

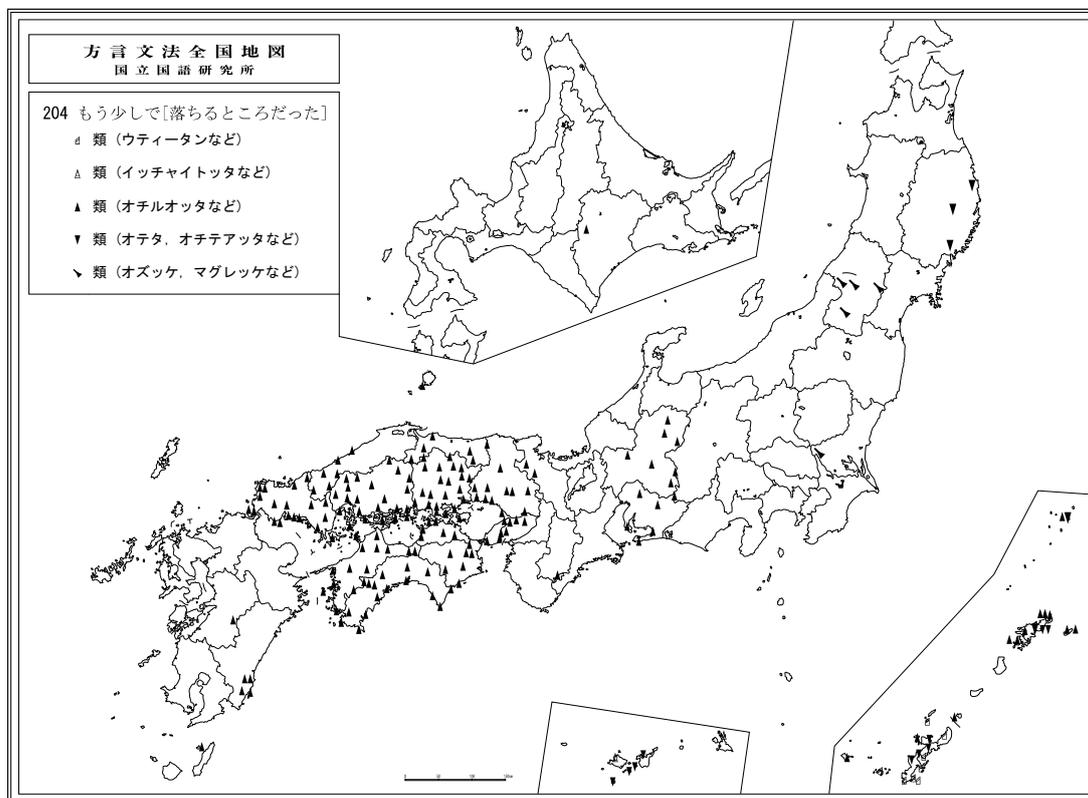


図 2 「もう少しで [落ちるところだった]」 (GAJ4 をもとに作成)

図 2 では、スルガッタはみられないが、スッケが山形県と茨城県で確認できる（山形県東根市、山形県西川町、山形県飯豊町、茨城県八千代町）。そして、シタ（オテタなど）が岩手県岩泉町、岩手県川井村、岩手県大船渡市と、鹿児島県十島村および伊仙町で確認できる^{注3}。気仙沼市方言は岩手県南部と方言的な類似性も認められるが、この過去の非実現形式においてもその連なりが窺える。さらに、GAJ4 では「[もう少しで] 落ちるところだった」という、「もう少しで」の表現に注目した地図も存在する^{注4}。それをみると、鹿児島県伊仙町の一回答を除いてなにかしらの表現で回答されており、「もう少しで」という表現が非実現の意味を表す際には必要であることが窺える。

さて、以上みてきたことをまとめると、過去の非実現を表す形式については、東北方言ではいくつかバリエーションが確認できることがわかる。まず、山形県方言を中心に「(危なく) スルガッタ / スッケ」が確認できる。また先行研究の記述等みても、「もう少しで / 危なく」の要素は非実現の意味を表すために必須であるといえよう。次に、気仙沼市方言でみられる「(危なく) シタ」であるが、岩手県沿岸部や鹿児島県の島嶼部で確認できる。いずれの場合も、「もう少しで / 危なく」の要素が付随していることがほとんどである。ここで挙げた形式は、「もう少しで / 危なく」のあとにテ

ンス過去の形式を持つことから、「(危なく) スルガッタ／スツケ」と「(危なく) シタ」を併せて、ここでは「(危なく) シタ」形式と呼ぶことにする。

4 「(危なく) シタ」形式の使用条件

ここまで「(危なく) シタ」形式のバリエーションと分布について確認してきた。ここからは、2017年8月に実施した東北大学国語学研究室の気仙沼市方言調査の結果および先行研究の記述から、「(危なく) シタ」形式の使用条件について考察していきたい。

調査は、2017年8月3日から5日にかけて、気仙沼市市民会館を会場としておこなわれた。その中で、計2名のインフォーマントの協力を得て、過去の非実現形式に関わる調査を実施した。インフォーマントは、高年層の男女各1名である。ただし、男性のインフォーマントのみ「(危なく) シタ」形式を「使用する(ことがある)／聞く」との回答を得ており^{注5}、もう一方の女性からは確認できなかった。調査項目と観点、結果は次の通りである。

(6) 調査項目と結果

調査項目	観点	結果
(1)「もう少しで落ちるところだった」	【主変】(GAJなど)	×
(2)「もう少しで魚がとられるところだった」	【主動客変・受動】(『会話集』)	○(聞く)
(3)「夕飯を食べ始めるところだったよ」	【主動・能動(緊急性低)】	△
(4)「もう少しで食べるところだった」	【主動・能動】	×
(5)「よかった、全部食べられるところだった」	【主動・受動】	○
(6)「もう少しで鍵を閉めるところだったよ」	【主動客変・能動】	△
(7)「もう少しで鍵を閉められるところだった」	【主動客変・受動】	○
(8)「もう少しで怒られるところだった」	【心理・受動】	×
(9)「もう少しで濡れるところだった」	【主変・意味的に受動】	○
(10)「もう少しで見つかるところだった」	【主変・意味的に受動】	△

(6)の調査データと先行研究の記述などをもとにして、以下、① 動詞分類、② ヴォイス、③ 地域差という観点から「(危なく) シタ」形式について言及する。

まず① 動詞分類による形式使用の傾向をみることにする。日本語方言のテンス・アスペクト研究では、工藤編(2001)の示すような動詞分類でとらえられることが多い。ここでも、ひとまずその分類から「(危なく) シタ」形式についてみる。(6)をみてわかるように、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞といった動詞分類に関わらず、この形式は使用されるようである。これは、(4)で示した山形県南陽市方言における「(危なく) スルガッタ／スツケ」についても同様である。接続する動詞については、少なくとも限界性を基準とする分類による偏りはみられないようである。

次に② ヴォイスの面についてみていく。『会話集』における用例は、全て受身の形(モツテガレダ、カジライタ)であった。調査においては、その点から受身の有無での使用の有無をひとつの観

点として調査をおこなっている。(6)をみる限り、受身でなくても使用できるようではあるが、受身の方が使用されている場合が多い。さらに、動詞の形態として受身形をとるか否かではなく、動詞が意味的に受動の意味合いを含む(主体が何かしらの行為を被る)かどうかという観点からも調査項目をたてている。(6)では、意味的に受動である場合にも、使用されやすいことが窺える。一方で、(4)でみた山形県南陽市方言では、受身の例は出ておらず、能動形でも問題なく使用できることがわかる。受身形はもとより、意味的な受動の場合の報告もみられない。山形県方言ではヴォイスに関わらず使用されているようであるが、気仙沼市方言では受動的な意味の場合の方が使用されやすいようである。ただし、GAJ4では岩手県などで「(危なく)オテタ」などが使用可能であるようなので、ヴォイスの面についてはさらなる調査・検討が求められる。

最後に③「(危なく)シタ」形式を構成する語の地域差についてみていく。すでにみてきたように、気仙沼市方言では「(危なく)シタ」であり、山形県方言では「(危なく)スルガッタ/スッケ」である。「もう少しで」相当の表現とテンス過去を表す形式が連なることで非実現を表すが、テンス過去の部分の形式には地域差がみられることもあり、過去の非実現を表す「(危なく)シタ」形式としてもバリエーションがみられる。

今回の調査で得られたデータと、先行研究の記述等から「(危なく)シタ」形式の使用条件について① 動詞分類、② ヴォイス、③ 地域差の面からみてきた。差異がみられる点、みられない点はあるものの、いずれにしても気仙沼市における追加調査、また方言間対照を見据え、山形県下などでの調査が求められよう。今後、さらに項目を増やしつつ綿密な調査をおこなっていききたい。

5 まとめと今後の課題

本稿では、『会話集』でみられた過去の非実現を表す「(危なく)シタ」形式について、そのバリエーションや分布を確認してきた。テンス過去形式のバリエーションと平行的に、非実現形式についてもバリエーションがみられた。「(危なく)スルガッタ/スッケ」については、山形県を中心に分布している。一方で、「(危なく)シタ」については、岩手県から宮城県気仙沼市にかけて(および鹿児島県島嶼部に)分布が確認できた。さらに、気仙沼市での方言調査結果やほかの地域における資料をもとに同形式の使用条件について考察してきた。その結果、動詞分類には左右されないが、ヴォイスについては地域により差がみられた。気仙沼市方言では受動あるいは意味的に受動を表す場合に使用されやすいようである。

最後に、今後の課題を挙げておく。本稿4節以降については、調査人数、内容等の見直しも含め、今後さらなる調査をおこなう必要がある。本稿の内容を踏まえ綿密な調査計画をたてることが重要となろう。また、そもそも表現を構成する語には地域差がみられることから、語自体の表す意味、表現全体としての用法、接続可能な動詞や使用可能な状況などの地域差についても想定に入れつつ確認する必要がある。

注

- 1 ショッタをはじめ過去の非実現においては、「危なく」といった副詞の使用がほとんどの場合で確認できる。そうでなければ、文脈で実際には起きなかったことが示される。ただし、その表現は一定ではなく、ここでは『会話集』にみられる形式に代表して「危なく」と示しておく。
- 2 同様の質問文で調査をおこなっている GAJ4 では「(危なく) シタ」形式は確認できる(本文図 2 を参照)。これについては、GAJ から『新日本言語地図』での経年による変化・衰退、もしくは過去の非実現形式として「(危なく) シタ」形式が認知されていないことによる記録漏れなどが考えられる。共通語においては違和感を覚える表現のため、よりそれらしい分析的なもの(スルトコロダッタ、シソーダッタ、シカケタなど)の記録が優先された可能性はある。
- 3 図 2 を見てもわかるように、GAJ4 では同系統の記号を琉球方言の回答に当てているが、奄美大島の一部や沖縄本島、南琉球でみられるそれらの記号は、テアッタ相当であることが考えられるため、ここでは考察の対象外とする。本文中にもそれらの地域は取り上げていない。
- 4 『新日本言語地図』では、「<もう少しで>落ちるところだった」の「落ちるところだった」に注目して回答を得ている。その際、「もう少しで」相当の表現の有無や語形を記録しているかは調査員によりばらつきがある。そのため、『新日本言語地図』からは、「もう少しで」相当の表現の必要性を示すことはできない。
- 5 「(危なく) シタ」形式を使用すると回答したインフォーマントについては、言語形成期において外住歴が多いこともあり、今後さらなる調査が必要になる。また、使用する場合には「丁寧、よそよそしい」といった内省を伴っており、第一回答ではいずれも「スルトコロダッタ(オズットコダッタなど)」が回答された。本データは、誘導によって得られたものである。この点からも、さらなる調査の必要性がある。

文 献

- 金田章宏(1983)「東北方言の動詞のテンス—山形県南陽市—」『琉球方言と周辺のことば』千葉大学教養学部総合科目運営委員会
- 工藤真由美編(2001)『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』文部省科学研究費成果報告書 2 大阪大学文学研究科
- 国立国語研究所編(1998)『方言文法全国地図 第4集』大蔵省印刷局
- 渋谷勝己(1999)「文末詞「ケ」—三つの体系における対照研究—」『近代語研究』10 武蔵野書院
- 竹田晃子(2012)「テンス・アスペクト」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 津田智史(2011)「テンス形式「-カッタ」」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 津田智史(2014)「方言アスペクトを再考する—山口市方言のヨル・トルの表す意味—」『地域言語』

津田智史 (2016) 「107.<もう少しで>落ちるところだった (将然相・回想)」大西拓一郎編『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』朝倉書店

東北大学方言研究センター編 (2016) 『生活を伝える被災地方言会話集 3—宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話—』東北大学方言研究センター

東北大学方言研究センター編 (2017) 『生活を伝える被災地方言会話集 4—宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話—』東北大学方言研究センター

本多 啓 (2000) 「方言文法と英文法(1)—宇和島方言の進行形をめぐって—」『駿河台大学論叢』

20

付 記

本稿は被災地方言会話集の分析・研究発表会「方言学の沃野 —談話資料から見える世界—」でおこなった口頭発表の内容を修正したものである。発表に際し、ご意見・ご助言をくださった方に記して感謝申し上げます。